

すべての多様性を輝かせるために

あらゆる多様性の尊重

優秀な女性研究者を育成・獲得することは、知の創出をリードする研究大学として重要な課題です。また、性の多様性や、様々な国・地域出身の方の文化・慣習の理解と尊重、さらに、何らかの障がいや心身の状態、家庭環境等で学修や研究・職務に不自由のある方など、あらゆる多様性と公平性を尊重し、包括的な教育研究環境・キャンパス環境整備を推進しています。



ダイバーシティ推進に向けた取組の強化

www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2022-04-01-0

京都大学男女共同参画推進アクションプラン（2022年度～2027年度）では、特に女性研究者の育成・獲得を重点事項として掲げ、①全学の女性教員比率（特定教員を含む）を2027年度に20%とする、②役員会構成員の女性比率を2027年度に25%とする、という数値化した達成目標を設定し、実現に向けた各種取組を定めています。また、男女共同参画推進センターでは、育児・介護支援では保育園入園待機乳児保育室の設置やベビーシッター利用育児支援、医学部附属病院と連携した病後児保育の実施など多様な制度の充実を図るとともに、学童保育施設の設置に向けて準備しています。

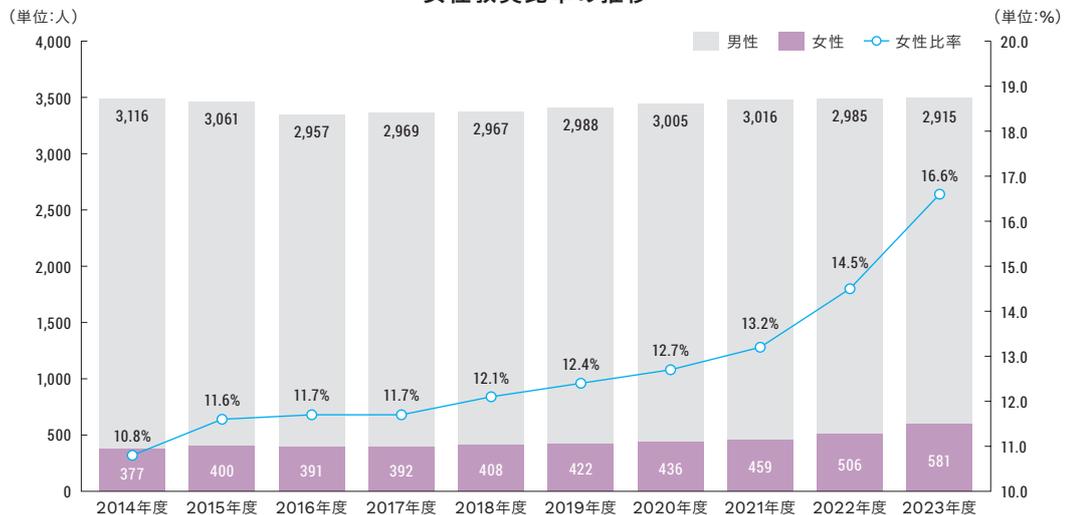


女性研究者・学生の顕彰

「京都大学たちばな賞」や「京都大学久能賞」の授賞も、若い女性研究者の励みとなり、受賞者が後に学外の重要な賞を獲得するなど、確実なステップアップを実感しています。また、2021年には、各方面でご活躍の京都大学出身の女性を対象に「京都大学このえ会」を設立してネットワーク構築を図り、女子学生・研究者への支援と女性活躍機会拡大や課題解決に取り組んでいます。2023年には、女子学生が、自らの好奇心や探求心を持ち、研究の面白さに気づき、チームで新しい課題にチャレンジする活動に奨学金を支給する、「女子学生チャレンジプロジェクト」事業を開始しました。



女性教員比率の推移



(データ基準日:各年度5月1日)

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン



女子中高生への応援 www.cwr.kyoto-u.ac.jp/for_girl/

本学の魅力を女子中高生や保護者の方々に伝える取組も積極的に行っています。毎年開催している「女子高生 車座フォーラム」のほか、「女子高生応援大使」の出身高校への派遣や、「出前授業」「オープン授業」も実施し、2022年から発行している広報誌『京からあすへ』や男女共同参画推進センターのホームページで、ロールモデルとなる女性研究者やOG 社会人を紹介しています。



男女共同参画支援たちばな基金 www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/tachibana/

創造的な学問・研究の発展のためには、十分な研究時間を確保することがとても重要です。本学では2019年に、「やりたいこと、あきらめない」をキャッチフレーズに「男女共同参画支援たちばな基金」を創設しました。本基金によって育児・介護中の研究者を対象とした支援を充実させ、意欲ある学生・研究者が安心して学業・研究に取り組める環境を作ります。



障害のある学生への支援 www.assdr.kyoto-u.ac.jp/drc/

京都大学において、学ぶことや研究することに障害（社会的障壁）が生じた時、どのような解決策や選択肢があるでしょうか。学生総合支援機構 障害学生支援部門(DRC)が、障害のある学生やその周囲の教職員、受験希望者の相談に応じています。専任スタッフが相談を受け、授業などでの合理的配慮の調整やノートテイク・移動介助等学生サポーターの派遣、AT（支援技術）の提供など、各種修学支援を行なっています。



障害学生支援ガイドブック

京都大学における障害学生支援のシステムやDRCの紹介、各種障害に関する基礎的な知識・支援方法などを整理し、冊子として教職員に配布しています。実際に障害のある学生に対応する必要がある場合には、その都度、個別に相談していくことになりますが、手がかりとして活用しています。

フリーアクセスマップ

DRCでは従来のものとは少し異なる視点で情報を表示する方法を考え、マップを作成し配布しています。本マップは、主に車椅子利用者などの移動困難者の目線で作成したもので、従来のように道筋や設備の使用を限定し指示するようなものではなく、目的地までのバリア（障壁）を適切に表示することで、自らのスキルに合わせて道筋などを選択できるような形式にし、ネーミングも「フリーアクセスマップ」としています。



12key Accessibility Calendar

学内外の多くの方に手にとっていただき、身近な視点から理解啓発につながるよう、アクセシビリティカレンダーを作成・配布しています。カレンダーの裏側には、12の小さなエピソードを掲載しています。「何気ない日常のなかで、少し立ち止まって“他の誰かの何か”にふと気づいてみる」そんなきっかけ作りのために、取り組みを続けています。

上記のコンテンツは、DRCのウェブサイトで公開しています。 www.assdr.kyoto-u.ac.jp/drc/contents/

